

## F. 文学Ⅱ(企画) 企画者：今泉秀人(大阪大学)

テーマ：「沈從文研究の現在」

座長：今泉秀人

報告1：福家道信（近畿大学）

『湘行書簡』の旅再考

報告2：齊藤大紀（富山大学）

湘西と北京——1990年代以降の沈從文研究から

報告3：津守陽（神戸市外国語大学）

沈從文、辺境を書くことのディレンマ

討論者：福家道信、齊藤大紀、津守陽

現在までに確認されている、日本における最初の沈從文作品の紹介は1935年『同仁』に掲載された「若墨といふ医者」（大高巖訳）である。それ以前にも大陸の邦字紙誌には、1926年の『北京週報』に春霞（藤原鎌兄）訳の〔懋林作〕「小説母親」（内容は戯曲、原題「母親」と、翌1927年の『満蒙』に柳湘雨訳「失明の父（戯曲）」（原題「盲人」）の訳出がすでにあつた。研究としては、1937年『中国文学月報』22号に発表された岡崎俊夫「沈從文小論」が嚆矢であろう。（同月報第三号「会報」欄に拠れば、これに先んじて1935年4月5日の同会第五回例会において岡崎俊夫が報告「老舎と沈從文（支那的なる現代作家）」を行っている）

爾来、八十年の長きにわたり我が国において沈從文の紹介・研究が続けられてきた。戦争中に発表された松枝茂夫の『辺城』（1939）や大島覚〔武田泰淳〕の『湖南の兵士』（1942）を始めとする比較的体系立ち、かつ優れた翻訳の数々は、戦後も『現代中国文学全集』（河出書房1954）、『中国現代文学』（河出書房新社1971）などによって引き継がれ、1980年代以降隆盛した小島久代、城谷武男、福家道信らによる研究の礎になった。彼らの新しい研究は、文革後の中国における沈從文再評価やそれに伴う基礎資料の陸続たる出版、そして日中間の人的交流のうねりと呼応しつつ展開され、90年代以降さらに下の世代がこの分野へ積極的に参入する素地を作り上げたと言える。20世紀末から十年間発行された研究誌『湘西 沈從文研究』（白帝社）の成果はそのことをよく示すものである。

本分科会では、現在の日本における沈從文研究の担い手たる福家道信、齊藤大紀、津守陽が顔を合わせ、先達の研究の歴史を振り返りながら、それぞれの研究実践や関心の在処について報告を行う。また近年における研究動向を踏まえつつ、現在及び未来の沈從文研究の課題と可能性についてフロアからの意見を交え討論を行う予定である。沈從文研究に携わる、あるいは興味を持つ方々の多くの参加を期待している。